

## 箱根太陽山荘（登録文化財の耐震改修工事）-----「伝える」ということ

富士・箱根・伊豆は首都圏からの近場の風光明媚な観光地であり、保養としての温泉地でもある。その中でも箱根は、どこか落ち着いた空気が流れているように感じるのは私だけではないだろう。

強羅温泉にある太陽山荘は、昭和15年に現在の本館主要部を新宿警視庁の保険療養所として建設された。一時、ドイツ領事館の疎開事務所として貸していたが、昭和22年から「和香荘太陽旅館」として営業を開始し、現在は民間の国民宿舎として営業している。

太陽山荘は室内意匠に大きな特徴がある。建物全体として箱根らしい落ち着いた温泉地の風情がある旅館であるが、その随所に、伊豆の旅館にも見られる露地風の意匠も見られ、箱根にある旅館としては珍しく、ラフな雰囲気醸しだしている。その露地風の意匠は、本館2階の廊下であり、床の仕上げを黒玉石の洗い出し仕上げとして、その上に木道を模した桧板を敷いている。また階段手摺や親柱も、古い伝馬船の材料を用い、どこか楽しげである。この廊下部分は昭和15年の建設当初からのそのままの形で残っている。

昭和15年から17年の工事期間であるこの建物は、まさに第二次世界大戦中につくられている。当時の建設事情からも推測されるが、各柱そのものは決して太くはない。しかしながら、各客室の床の間は、そんな状況の中でつくられたからなのだろうか、個性あふれる床柱、変木が様々な形で用いられ、部屋毎に違った雰囲気をつくり出している。それがどの部屋においても、格式ばった形式的な意匠ではなく、チャーミングである。それらの建築意匠が評価され、平成18年度に登録有形文化財として文化庁から評価を受けた。

太陽山荘が50年以上の間、そのままの形で残っている部分が多いのは、代々の女将をはじめ旅館に携わる方々が、建物の良さを理解し、大切にしてきたからである。「古い建物であるけれども、お客様に気持ちよく使ってほしい。だから、古いから嫌だとお客様に思わせないように、清潔さを保つことに心がけている」と女将が話しているように、いつでも隅々まで掃除が行届き、清々しい。宿泊客は常連客が多いときくが、それは寛ぎと、家族のやさしさと、加えて箱根という温泉地の旅館としての伝統と格式を感じることができるからなのだろう。

ピカピカに磨きこまれた木造の廊下や階段には、旅館として多くの人に愛されてきた、建物と家族の長い歴史を感じることができる。

### 現実を読みとる

改修工事の耐震設計をするにあたり、解体する前に床下や天井裏に潜り、構造の詳しい調査をしてみた。宿泊客への時代的な要望に答えられるように、幾度となく増改築が繰り返されていた。部屋を大きくしたり、小さくしたりするために、柱が抜かれ、梁が切断されている部分が多く見られた。その時に柱・梁を補強するために入れた新しい柱や梁も、次の改修には配慮されていない。それは一部屋毎の改装であったからなのだろう。これは

太陽山荘が特別なのではなく、多くの古い建物に共通して言えることである。施主は、構造のことまでは解らない。自分の要望というよりも、客の要望に答えられるように大工に工事をお願いする。大工も建物全体を見ている訳ではなく、その時々で施主の要望に精一杯答えようと工事をする。太陽山荘の場合は、旅館であるが故、その増改築の回数が多かったに過ぎない。これは単純な改修工事ではない、と判断した。

### 施主家族に伝える ―ぶつかり合う立場―

太陽山荘の耐震改修工事で、設計者としての大きな役目は、表面的なりフォーム工事と異なり、施主に建物の現状、地震時や火災時にどのような危険性があるのかななどを、正確に、勇気と誠意を持って伝えることにある。

設計者として私は言った。建物の安全性を確保すること、特に旅館として宿泊客の人命を守るためにはどのようにすべきか、そのためには工事費がいくらかかりそうなのか、工事期間が想像以上にかかりそうなこと、イコール工事中は旅館の営業ができないことでもある。

しかしながら、多くの金額をかけても、強度や防災に対しては、新築のようなレベルまで到達できないこと。単純に工事費と工事期間をかけることと、それに対しての工事とその完成時に予想される建物の成果を、バランスで考えると、新築した方がよいかもしれないこと。

同時に、この事実を知った以上は、このままの状態を旅館を続けることは避けた方がよいのではないかと、設計者として責任をもって進言した。

施主家族は言う。この旅館は今まで家族が大切にし、磨きこまれた建物は決して新築では買えない重さがある。家族にとって「太陽山荘」は建物も含めてすべてが自慢であり、自分たちの仕事の誇りであり、この古い建物で旅館を運営していくことが、家族にとっての生き甲斐である。

長く続けてきたので、古くからの常連客もいる。新しくしたからといって、宿泊料金を一気に上げることはできない。旅館を運営していく上で、建築投資する金額を通常の営業の中で、少しずつ取り戻していくのには長い時間がかかる。毎日が大切なお客様を預かる、気を抜けない暮らしであると共に、観光シーズンで宿泊客が多い日もあれば、シーズンオフで少ない日もあり、宿泊客には常に同じように対応してなくてはならない。目には見えない人件費と経費がかかる上、何処までの耐震工事や防災整備をすればよいのか、わからなくなるという。

加えて、従業員は基本的に家族なので、営業できない期間も従業員に給与を支払う必要はないが、それでも毎年の恒例行事や四季の移ろいを楽しみにしている常連客に宿泊の断りを入れなくてはならない。常連客が他の旅館を探し出すことは、他を気に入れば、ここを離れていく可能性があるということであり、経営者にとっては将来の不安要素にもなる。設計者が掲げる理想と、実際に経営していく日々の苦労・現実には大きな差がある。

施主家族は切々と私に訴えた。そのはざまでも度々自身に問いかけた。私が設計者として行き着いた答えは、旅館として非常時に宿泊客の人命を確保できる、安全な建物にまで持っていきたいということだった。

施主にとっては、ショックも大きかったに違いない。私も建物の良さがわかり、旅館経営者の苦勞も理解するように心がけ、誠意を持って説明したつもりだが、施主には、やはりどこかで、建物すべてを否定されたように、聞こえたこともあったと思う。そんな中で、施主は家族で何度も話し合い、この建物をできるだけ安全にして、旅館を運営していこうとする道だった。「今まで稼いできた大切なお金を、この建物に投資することに後悔はない」とまで言ってくれた。

### 施工者に伝える — 「旅館」の耐震改修ということ—

太陽山荘の常連客は、年配の方が多いう。また毎年秋には、都会に住む障害を持つ子どもたちが、太陽山荘を訪れ、箱根の自然と情緒に触れることを楽しみにしている。どのような現状でも、この工事の関係者にとって共通認識すべき大切なことは、不特定多数の様々な方が泊まる「旅館」であるということである。そのことを常に頭に置きながら、具体的に内容を整理しはじめた。

- ・文化財の意匠として残すべき部分はどこか？壊す場合、新しく補える方法はあるのか？
- ・どの部分が構造的に補強が必要で、工事をして効果が期待できるのか？
- ・防災として工事しなければならない部分はどこか？工事出来ない部分はどのような方法で補うのか？
- ・寒冷地である箱根で、古い建物に空調設備を整備するための配管をどのように隠すのか？
- ・工事費として施主はどこまで出すことが可能か？工事の優先順位は何か？
- ・工事の箇所順番と工期、部分的に使用できる時期の目安はいつか？

耐震面では、大地震が来た際に一気に倒壊することなく、宿泊客および家族の人命を助けられるように耐震補強をする。ただし建物は大きなダメージを受けるため、その後は建物として使用できない可能性が高い。耐震構造設計の計算では、倒壊しない水準である耐震基準 1.0 を目指しながら、数値のみでなく、現場状況を見て、どこの構造が有効的なのかを何度も照らし合わせ、その都度、予算も確認し、まさに施主・設計・施工の 3 人 4 脚で、設計と工事を進めていった。

### 消防署に伝える — 本当に必要な防災とは何か—

50 年以上経つ建物が、現在の法的基準に合っている訳ではない。特に観光地であり、旅館が多く、傾斜地である箱根町の防災の条例は他の地域よりも厳しい。しかしながら私は、箱根町消防署に今回の耐震改修工事の主旨と施主の思いをストレートに伝えた。「如何に人命を守れるか」を主に議論し、具体的な防災方法を考えていった。近年開発されたパッケージ式の屋内消化栓を各階に配置し、火災報知機の設置を義務付けられている箇所には徹

底して整備させた。もちろん全てにおいて、現行法規に合うようにはできない箇所もある。やはり文化財としても評価されているような、古い木製の部分を壊して、新しい不燃材の内装に仕上げることはできない。ただ、それをそのまま放置する訳ではなく、別の手段で防災的に補えるように、避難通路の要所には、防煙たれ壁を設置して、火災発生時に一気に煙が充満してしまうことを防ぐことができるように配慮した。

このように太陽山荘も、改修できる部分とできない部分に分かれてしまったが、設計者が消防署に現状を整理した図面を提出することは防災として大きな意味があった。工事ができない部分は既存不適格部分として図面化しておき、将来、改装工事する時に、今後考慮すべき部分として、施主にも消防署にも解るようにしておく。

そしてこの図面化は、工事完了後に施主が旅館を運営していく中で、消防署の定期的な検査や、毎年必ず実施する防災訓練を行う時に、宿泊客を避難経路誘導できるかを確認し合うことに、最大限に活かされるのである。

防災は建築や設備のハード面の整備も大切だが、宿泊客に必ず避難通路を説明することや、非常時に旅館関係者が円滑に誘導することの方が大切だということだ。

消防署への防災申請は、設計者の法的な責任だけではなくて、施主と消防署とのコミュニケーションを取るための懸け橋になったと思う。防災は科学的ではあるが、最終的には「人と人」との繋がりが安心と安全を確保できる手段だと改めて感じている。

箱根町消防署では、耐震改修工事を目的として、消防署に申請してきた初めてのケースだと話していた。防災は毎年厳しくなっているが、歴史がある箱根という地に、古くからの木造旅館が営業し続けるためにも、消防署と防災について共に考えることは大きな意義があったと思う。

## 職人に伝える 一縁の下の力持ち一

予め行った調査を元に、建物のどこを補強すべきかを構造耐震プログラムで設計、計算したが、図面上も計算上も、どうしても構造的に不明瞭な部分が多かったため、解体は部分的に丁寧にしていった。そのつど、現状に合わせた耐震計算をし直し、加えて建築的に残したい意匠部分は傷つけることがないように、重ね柱などを施して、構造、意匠も満足できるように施工していく、日々内容が変わる作業だった。従来、職人は工事全体を見込んで請け負うため、そのたびに工事が中断されたり、日数がかかる工事を嫌がる。効率を考えると、職人達は苛立つばかりである。しかし、設計者として各職人に、「この建物に使われている木材の目や癖、魅力を見極めながら、先人の大工の技術の粋を読み取り、しかも単なる真似ではなく、自らが新しくつくり出そう」と叱咤激励しながら、工事に臨んだ。

太陽山荘は、箱根岩山の傾斜地に建つ。そもそも建物の1/3以上は基礎がなく、大きな岩の上に直接柱を立て、建物を支えている。場所的には木造3階になる箇所もある。そのような建物の足固めは難しいものではあった。上に建物があるため、大きな工具はいらない。

すべてを人力に頼るしかない。既存の基礎がある部分を頼りに、擁壁を造る方法で鉄筋

を組み、スランプ値の高い硬めのコンクリートで岩が動かないように固定していった。

職人の技や力は、建物の表面だけではない。まさに「縁の下の力」となるような骨組みがしっかりあってこそ、建物も人も生かされると改めて考え直すことができる。

どのような建物にも、その家族の歴史があり、想いが刻まれている。そして建物は、人々の生活を鼓舞できる空間なのである。

そのために、設計者は建物を残し活かそうと考え、加えて、安心と安全が確保できるように配慮すべきである。そしてそれぞれの家族の歴史を大切にしながら、その建物、そのまちへの広がりをも考え、生きている家、生き生きしている人、そして町をつくっていくのが本来の役目ではないか。

太陽山荘の改修工事を終えて、建築には、施主、施工者、設計者、そして役所の担当者それぞれが必要であると改めて認識することができた。当たり前のことだが、建築を生かし続けるためには、まずは設計者が毅然とした姿勢で、各立場の人に誠意を持って「伝える」ことをしなくてはならない。

50年を超える旅館という特殊な建築の良さを生かして、これからも長く生かしていきたいと、関わる人々それぞれに建築への愛着と仕事への情熱があったからこそ、みんな逃げずに互いに本音でぶつかり合い、ひとつのものに収斂されていったのだと思う。

個々の立場、状況、そして何よりも自分の仕事に対しての誇りを「伝えた」からこそ、古い建物でも新しい道が開かれたのだ。

ただ今回の工事が、古い建築意匠を生かしながら、心地よく、使い勝手のよい、かつ安全な空間に改修できたのも、そして施主、施工者、設計者、役所の担当者がよいコミュニケーションを取れたのも、稀なケースだったのかも知れない。さまざまな葛藤はあっても、工事費や工期に関して施主の理解が得られたということ。また施工者も初めから単に利益だけを考えれば、商売としてはなかなか請け負うことに躊躇してしまう工事でもあったこと。これらの意味で特殊解といえると思う。

しかし、もしも今後、似たようなケースが出てきたときに特殊だからと思うのではなく、立場の違いを乗り越えて、一般解に高めていく努力が必要であると感じている。どのような街にもある古い建物に住み続けたいと、住む人が思ったときに、お互いに建設的に話し合い、みんなが納得できる道を見い出すべきなのである。

太陽山荘は、これからも宿泊客に寛ぎを与え、安全を伝え、建築当時の意匠も大切にしながら、新しい歴史をつくっていくだろう。